

林徳寺だより 第十号

無量壽

平成20年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語⑪

林徳寺だより第十二号（平成十八年八月一日発行）に書いたように、浄土真宗の開祖である親鸞聖人は、弘長二年十一月二十八日に九〇歳で亡くなられました。

お弟子や末娘の覚信尼様は、その遺骨を法然上人の墓所（現在の知恩院）に近い、東山大谷の地に葬られました。

覚信尼様は、聖人の同族である日野広綱様と結婚され、**長男の覚恵様**と**長女の光玉様**をもうけておられます。ところがご主人の日野広綱様は、若くして病死をされます。長男の覚恵様がまだ七歳であったといわれています。それでやむを得ず覚信尼様は、覚恵様を聖人が得度をされた青蓮院に預け、ご自身は父親である聖人の元に戻られ、そして聖人の最期を看取られることになるのです。



青蓮院

このように、本願寺に、本願寺は聖人のお墓を元にして成り立つたお寺なのです。現在の東西本願寺を参拝され

その後覚信尼様は、中院少将具親様のお子である**小野宮禪念様**と再婚されます。そして、禪念様がお持ちになつておられた、約一四〇坪ほどの土地に住んでおられました。そこは、青蓮院に隣接し、覚信尼様が聖人を葬られた所からも遠くない場所でした。そこで覚信尼様夫妻は、**聖人のお墓をそのお住まいの敷地内に改葬し、聖人の廟堂として守つていこう**と考えられました。

そのためには、新たに建物を建てる資金が必要でした。そこで**関東に残る聖人のお弟子に協力を仰ぎ**、聖人没後十年目にしてようやく廟堂が完成しました。これが現在の**本願寺の始まり**です。

ますと、どちらも阿弥陀如来を安置する阿弥陀堂より、聖人のお木像を安置する御影堂のほうが大きな建物になっています。



崇泰院に今も残る親鸞聖人のお墓

不思議な感じを抱かれる方も多いのではないかと思います。本願寺の始まりが聖人のお墓であったことがこのようなどころに現れているのです。

本願寺はこの後、歴史の流れで様々な変化を経て現在に至っていますが、この覚信尼様が最初に廟堂をお建てになった地には、現在**崇泰院**というお寺があり、聖人のお墓が今も残されています。現在の**本願寺**からみると信じられないほど狭い敷地ですが、その後覚信尼様の子孫が代々この地に生まれ、八代目**蓮如上**人もこの地でお生まれになったのです。

浄土真宗の作法・心得（シリーズ8）

行事 その三

仏教全般あるいは浄土真宗の教えに基づく行事がいくつかあります。今回はその中でも、本山で行われる行事を紹介します。

〈本山・西本願寺での行事〉

○元旦会 ……一月一日。

○大御身 ……一月八日。

親鸞聖人御影像のお身ぬぐいをします。

○御正忌報恩講 ……一月九日～十六日。

親鸞聖人の祥月命日（新暦の一月十六日）を縁に一週間営まれる、本願寺最大の年中行事です。

この間には国宝の「鴻の間」でお齋の接待も行われます。

○春季彼岸会 ……春分の日を中心に七日間。

親鸞聖人のご誕生を祝って催される行事です。

○宗祖降誕会 ……五月二十日・二十一日。

この日は、能や国宝の「飛雲閣」での抹茶接待など華やかな催しが行われます。

○児童念仏奉仕団 ……七月下旬～八月上旬。

一泊二日の日程で、全国の小学3年から中学1年生の子供を対象に、親鸞聖人のみ教えを学び、次の世代を担う宗教情緒豊かな仏の子に育てようと、毎年夏休みに行われる行事です。

○全戦没者追悼法要 ……九月十八日。

東京の国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて、毎年、御門主様が御出席されて行われます。

○秋季彼岸会 ……秋分の日を中心に七日間。

○龍谷会 ……十月十五日・十六日。

大谷本廟の報恩講です。

○お煤払い

……十二月二十日。

大団扇を使ってほこりを払うのが有名です。テレビや新聞などでご覧になったことがありません。



龍谷会での行列

※このほかにも多くの行事が行われていますが、主なものだけを記載しました。

日本語になった仏教の言葉 ⑪

《有無》

仏教では「すべての現象が、目に見えて存在している」という説と、「見えてはいるが、実は存在していない」という説があることを有無といいます。そして人はそのいずれの判断や主張にも、とらわれてはならないとしています。

「正信偈」の後に拝読する、親鸞聖人がお作りになった和讃に、

解脱の光輪きわもなし
光燭かむるものはみな
有無をはなるとのべたもう

平等覚を帰命せよ

とあります。「解脱の徳がある無辺の光身に蒙るものはすべて、有無の偏見を離れるとお説きになっています。平等覚の阿弥陀仏に帰順しましょう」という意味です。阿弥陀仏の教えに出会ったものは、「有無の偏見」にとらわれない、自由な見方で世の中をとらえることができるのです。

参考：『知ってびっくり仏教由来の日本語』草木舎